

ビリーブメモリース

四神 夏菊

テトラクリスタルアイランド

ソニック達と分かれたストレンジャーは移動用に使った宝石と共に、島の近くのミドルガーデンへと出てきた。

『・・・やっぱり少し、寂しいかな。』

ストレンジャーは宝石を回収し、島へと戻っていた。
島へ戻ると家の近くに4人の人影が。

「あ、やっと帰ってきた、お帰りー」

手を振って出迎えたのはアルドール。
その近くではピスフリー、ジョイ、ビリーブが同じく手を振っていた。

「お帰り。」

「無事に送れましたか？」

「ああ、皆をトロピカルアイランドに送っていったぜ。」

「じゃあこれから一仕事だね。」

アルドール達はストレンジャーから宝石を一個ずつ受け取り、島の中心へ向かっていった。

泉の庭園

「それで、大体することはわかったのか？」

ストレンジャー達は島の中心の泉へ向かう途中で、アルドール達に問いかけた。

「ええ、ストレンジャーがいない時に、手分けして族長様たちに聞いてきたの。」

「で、まずする仕事がコレの管理だと。」

ピスフリーは持っていたダイヤを人差し指の上で回しながら言った。

「それからは種族達の健康管理に、島の手入れなんだって。」

「やることがたくさんなんだな。」

「そういうこと。」

5人は仲良く会話をしつつ、泉へ向けて、森を進んでいった。

「ようやく付いたな。」

島の中心には自然に出来た森の一角があり、そこには綺麗な水が湧き出る泉があった。

「昔とおんなじだな。」

「皆と良く、ここで遊んだんだっけ。」

4人は少し思い出に浸っていた。

「とりあえず宝石を何とかしないと。」

「おっと、そうだったな。」

ビリーブの一声で現実へ戻された4人。

「じゃあとりあえず泉でいいか？」

「ええ、いいわよ。」

5人は泉のそばへと行った。

「じゃあここら辺でいいか？」

「うん。いいぜ。」

ストレンジャー達は泉の中に持っていた宝石を水へ浮かべた。

すると宝石たちは泉の上へ浮かび上がり、自ら浮き始めた。

「とりあえず、宝石はコレでいいのか？」

「ええ、四神達が気に入ったお気に入りの場所に、宝石を管理するのがいいんだって。」

「じゃあ次は、健康管理だったな。」

四神の仕事を取りあえず一つ終え、とりあえず1段落の4人。

「じゃあそれぞれで仕事をしましょ。」

「またあとでな。」

アルドール、ピスフリー、ジョイは自分の管理するエリアへと戻っていった。

「ビリーブは、これからどうするんだ？」

ストレンジャーは残ったビリーブへ問いかけた。

「今現在では、闇に魅入られた場所は感知できないので、しばらくここにいてもいいですか？
自分は特に家とかは持っていないので。」

「別にいいぜ、俺の家でしばらく過ごしなよ。」

「ありがとうございます。ではしばらくお手伝い込みで、ご厄介になりますね。」

「ああ、頼むぜ。」

ストレンジャーはビリーブと共に東側のエリアへ戻っていった。

「おかえりなさい、ストレンジャー。」

「ああ、ただいま母さん。」

森を抜け、東側のエリアへ戻ると、母龍が出迎えた。

「しばらくビリーブを、家で寝泊りすることにしたいんだけど、いいか？」

「いいわよ。ビリーブさん。ヨロシクね。」

「こちらこそ、お世話になります。」

ビリーブは母龍にお辞儀をした。

「じゃあ俺は、ちょっと皆の状況を見てくるから。」

「あ、ストレンジャーさん。僕も手伝います。」

ストレンジャーのあとをビリーブが付いていった。

「なんか兄弟みたいね、あの二人。」

母流は微笑み、家へと戻っていった。

その後しばらく、ストレンジャーとビリーブは二人で東側のエリアを周り、他の龍達の健康状態をチェックした。

時々ケガをした種族達がいると、ストレンジャーとビリーブは傷の手当てをしていた。

「ふう、コレで大丈夫かな。 平気か？」

ストレンジャーが傷を癒すと、ケガをしていた龍へ聞いた。

「はい、おかげで楽になりました。 ありがとうございます。族長様。」

「いいって、コレくらい。」

「じゃあ次へ行きましょうか。 スtrenジャーさん。」

「ああ。」

ストレンジャーとビリーブはまた、他の種族達の様子を見に行った。

「族長様ですって。 ちょっと聞きなれないんじゃないですか？」

ビリーブはストレンジャーの顔を覗き込みつつ言った。

「まあ、いつも名前だったからな。 でもコレも、しばらくしたらなれるよ。」

ストレンジャーは頬を掻きながら言った。

「頑張ってくださいね、青龍様。」

「おう。」

その後、島の様子を見に行った。ストレンジャーとビリーブ。

地区によって植物が生えてない場所があり、その場所にストレンジャーは地面へ手を当て、草花を召還した。

「これで、島が緑豊かになりそうですね。」

「そうだな。でもまさかこんな力が使えると、思っても見なかったけどな。」

「四神は、もともと5元素の力を使えるって聞いたことがありましたけど。 そうなんですか？」

ビリーブはストレンジャーに問いかけた。

「確かに、それは本当だな。 火、水、木、金、地の5つ 青竜の俺は木の力が使えるようになったみたいだな。」

「アルドールさんは火、ピスフリーさんは金、ジョイさんは水。あとの地は誰がつかえるんですか？」

「地は俺達四神が集まって使える力なんだ。 どんなのはやっぱりわかんないけど。」

「そうなんですか。 勉強になりました。」

「じゃあそろそろ帰るか。母さんが待ってるだろうし。」

「はい。」

ストレンジャーはビリーブを持って、自分の家へ帰っていった。

「ただいまー」

家へ帰った二人、家では母龍が出迎えた。

「お帰り二人とも、 先にシャワーを浴びてきなさい。 夕食の仕度をしておくわ。」

「はい。」

二人はバスルームへ向かっていった。

数分後。

「ふう、気持ちよかったー」

シャワーを終え、出てきた二人。

「今日はお疲れ様二人とも。　たくさん食べてね。」

「はい。　いただきまーす！！」

3人は楽しいディナーを過ごした。

その後、少々リビングでくつろぎ、二人は寝室で早めの休息を取った。

一方、南側のアルドールの家。

「そういうわけで、ストレンジャーと会うまでが大変だったのよ。」

「そうだったのか。たいへんだったな。」

「でも会った時、うれしかったんじゃない？　一応ボーイフレンドだものね。」

アルドールは久しぶりの家族そろってのディナーを楽しんでいた。

アルドールの家は南側の森に近い家だった。

家のつくりは良く、豪邸に近い家に住んでいた。

「お、お母さん・・・！」

アルドールは顔を赤くして言った。

「いいじゃない、赤くなっちゃって、本当に正直なんだからアルドールは。」

「でも、ストレンジャーなら昔から会ってるけど、優しいしな、いいんじゃないか。」

「もう、お父さんまで！　そんな関係じゃないってば！」

「ハイハイ、わかったわかった。」

アルドールは顔を赤くしつつも両親とのトークを楽しんでいた。

『私とストレンジャーはそんな関係じゃないもん・・・　確かに優しいし、カッコいいけど・・・』

アルドールは顔を赤くしつつ、そんなことを考えていた。

かわってこちらは西側のピスフリーの家。

「でも驚いたぜ、まさか二人がそろって、俺たちの前に現れるたんだから。」

「そうだったのか。最初にこの島までこれたまではよかったんだな。」

「そうそう、最初は俺たちだったんだけどな。」

ピスフリーもアルドールの家と同じく、両親とのディナーを楽しんでいた。

ピスフリーの家は岩肌の一角を削った場所にあった。

いわゆる洞穴である。

「でも無事でよかったわ。おまけに族長になっちゃうんだもの。立派だわ。」

「ありがとうお母さん。」

「これからもしっかり島を守ってくれよ。」

「わかったぜ、お父さん。」

最後に西側のジョイの家。

「最初にお父様が島に倒れていたときは、本当に驚いたわ。力尽きてるのかと思っちゃった。」

」

「おいおい、そこまで私は体は弱くはないよ。」

ジョイは父親をからかいつつ、ディナーを楽しんでいた。

ジョイの家は西側エリアの中心にある家。

アルドールと同じくらいの豪邸に住んでいた。

「でも昔、種族という壁を乗り越えて、貴方達が遊んでいたときはちょっと今を期待しちゃったわ。今までそういう人たちがいなかったから。」

「そうだったの？ 私てっきり他の方々もそういう関係なんだと思ってたー」

ジョイは少々驚きつつ言った。

「まあ珍しいことは珍しいな。先代の族長様達も一応会うことは会ったが、ソコまで交友的じ

やなかったしな。」

「これまでのことは皆無で、貴方も楽しく、族長として頑張んなさい。」

「わかりましたわ、お母様。」

5人はエリアはバラバラだったが、それぞれで楽しい一時を過ごしていた。

一方、ストレンジャー達と分かれたソニック達。

こちら相変わらず、いつもと同じような毎日を送っていた。

「ソニック～」

エミーはテイルスの工房の前にいたソニックの元へ駆け寄っていた。

「エミー、どうしたんだ？ こんな時間に。」

ソニック達が居た時間はストレンジャー達と同様、夜。

辺りは月明かりと星明りのみで、少し薄暗い。

「多分、ソニックと同じ事を考えてたんだと思う。 ちょっとテイルスが心配で。」

「ストレンジャーと別れてから、今までと変わらない感じで過ごしていたけど、なんか引っかかるんだよな。」

ソニックは別れてからのテイルスの様子を思い出して言った。

「そうなのよね。 だからちょっとテイルスの様子を見に来たの。」

「ちょっと見てみるか。」

ソニックとエミーは窓からテイルスの部屋を見た。

テイルスは一人、フルーツを食べて本を読んでいた。

そのあと、メカエリアへ通じるマンホールを開け、中へ入っていった。

「メカエリアに向かっていったな。」

「何があるのかしら。」

ソニック達はこっそり、テイルスのあとを付いていった。

メカエリアへ付くと、ソニックとエミーはテイルスを探した。

テイルスはテトラクリスタルアイランドを探すときに使っていたモニターの前に、ちょうど操作をしていた。

「もう少しで見つかりそうなんだけどな・・・」

テイルスはそういいつつ、何かを探していた。

『探し物？』

『何を探してるのかしら？』

『聞いたほうが早いな。』

ソニックはテイルスの元へ

『あ、ちょっ ソニック！！』

「テイルス。」

「うわ！？ ソニックどうしたの！？？ こんな時間に。」

ソニックに後から話しかけられ、テイルスは動揺していた。

「お前、ストレンジャーと別れてから、なんか変じゃないか？」

「え？ そうかな・・・」

テイルスはソニックの顔を見たあと少々横を向いた。

「なんかあったか？」

ソニックはテイルスにそう言った。

テイルスは少々俯いて言った。

「やっぱりいつもいた人たちと別れるのってさびしいなって。 だからあの時使ったこのメカでストレンジャー達の居る島を探してたんだ・・・」

「俺も少し寂しいさ。 あんなに気を使ってくれる奴なんて見たこと無かったからな。」

「私も、本当に始めて会った感じなのよね。 彼。」

「お前だけじゃないって。 それにストレンジャーが別れ際にお前に元気付けてくれただろ？
あんまり寂しい顔してるとストレンジャーが心配するぜ？」

「うん。わかってる。 ストレンジャーも大変なんだもんね。 本当の青竜になって、仕事して
るんだもんね。」

「まあな。」

「だから、僕もソニックやストレンジャーのようになりたいんだ。 自分から少しでも、そんな
感じになれるように。」

ソニックとエミーは少し寂しそうにしているテイルスを励ましていた。

「まあとりあえず俺たちも出来ることはするから、もう寝なって。 お前ずっとこれ、やってた
んだろ？ 眠そうだぜ？」

「うん。わかった。」

テイルスはモニターの電源をOFFにし、ソニック達と工房へ戻っていった。

そしてその夜。

「あれ。ここ。どこだろう・・・」

テイルスは一人、どこかの島の上に立っていた。

だが霧が濃すぎて周りが見えない。

しばらくすると少しずつ霧が晴れ、辺りが見え始めた。

「ここって、ミドルガーデン？」

テイルスはミスティックルーインにある、ミドルガーデンの上に立っていた。

「久しぶりだな。テイルス。」

「！？ ストレンジャー！！」

テイルスの向いていた方向の上空にはストレンジャーがいた。
飛んでいたストレンジャーは少しずつ降りてきて、島へ足をつけた。

「ストレンジャー、どうしてここに？」

「ここは夢だぜテイルス。 夢はどこの場所においてもつなげてくれる場所、だからな。」

「そっか夢なのか。」

テイルスは辺りを見渡しつつ言った。

「でもお前の前にいるのは、あの時いっしょにいたストレンジャーだぜ。」

「ストレンジャー。。。」

テイルスは少し俯き、涙をこぼした。

「僕、やっぱり寂しいよ。 あの時、頑張るって、言ったんだけど、寂しいよ。。。」

テイルスの言う言葉は、涙と共に言われた。
途切れ途切れだが、しっかりと。

「ゴメンなテイルス。 一人ぼっちにさせちゃって。」

「ううん。でも、コレでも頑張ってるんだ。」

テイルスは涙を拭いた。

「ストレンジャーが来てくれる時まで、頑張ってる！ こっちも、会いにいけるように頑張るから！！」

「やっぱり強くなったな。テイルス。」

そういうと、ストレンジャーはテイルスの元へ。

「もう少しだけ待っててくれ。 必ず会いに行くからな。」

「うん。約束だよ。」

「約束。」

テイルスとストレンジャーは指きりをした。

「待っててくれよな。」

「うん！」

すると前は霧が濃くなり、辺りが見えなくなった。

テイルスが目を覚ますと、家のベッドの中にいた。

「夢・・・」

テイルスは辺りを見渡した。

「夢落ち？」

「いや、夢だけじゃ終わらせないぜ。」

テイルスは声のした方向を見た。

するとソコには、柱に背中を預けて立っているストレンジャーがいた。

「ストレンジャー！？」

テイルスはベッドから飛び出し、服を着ていないストレンジャーの元へかけていった。

「ストレンジャー、どうしてここに！？」

さすがに夢から覚めたばかりで少々パニック状態のテイルス。

「さっきも言っただろ？ 会いに行くって。」

「ゆ、夢で言ってたあれ？」

「ああ、ちょっとビリーブに頼んでテイルスの夢に出てきたんだ。 とりあえず少し落ち着けて。」

パニック状態のテイルスを鎮めるストレンジャー

「う、うん。 で、ビリーブって？」

「まだあってなかったもんな。 ビリーブ。」

ストレンジャーは部屋の奥へ向かって呼びかけた。
すると奥の部屋にいたビリーブが部屋へ入ってきた。

「おはようございます、テイルスさん。」

ビリーブはテイルスに軽い会釈をした。

「おはよう、君が、ビリーブ？」

「はい、本名はビリーブ・ザ・セレモニーって言います。 マイルス・パウアーさん。」

「名前はストレンジャーに聞いたんだね。 よろしく、ビリーブ。」

「こちらこそ。」

二人は握手をした。

「ビリーブは少し夢を操れるんだ。 親元がそういう力を持っていたんだっけ？」

「はい、お父さんが、少しそういう力を持っていたんです。」

ビリーブは笑顔で二人へ言った。

「待たせてゴメンな。テイルス。」

「ス、ストレンジャー！！」

テイルスは涙目でストレンジャーに抱きついた。

「会いたかったよー。。。」

「ゴメンな。しばらく一人っきりにしちまって。 さすがに仕事が多すぎてな。」

「うわーん！！！！。。。」

テイルスはストレンジャーに抱きついたまま、涙を流した。

ビリーブは静かに隣の部屋へ戻って行った。

「おいおい、そんなに無くなって。」

「う、うん。。」

テイルスは涙を手で拭った。

テイルスはストレンジャーから離れ少し後へ。

「でもそうすると、またこれるようになったの？」

「ああ、大体片付いたからな。 またちよくちよく顔を出すからな。」

「うん！」

テイルスはストレンジャーに微笑んだ。

そしてしばらくしてソニック達に来て、テイルス同様に驚いていた。

ストレンジャーはテイルス同様に今までの事を説明し、落ち着かせた。

それからしばらく、前と同じような生活をした。

それからというもの、時々ではあるが、ストレンジャーは一人だったり、他の人を連れてきたりと、ちよくちよくテイルスたちの前に現れるようになった。

テイルスが別れた時のように、寂しい顔をさせないために。

— END —

ビリーブメモリス

<http://p.booklog.jp/book/89420>

著者：四神 夏菊

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lilysfia/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/89420>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89420>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ